

法令などの8カテゴリーに分け、③本文のみならず膨大な註からも余さず拾っている。学術書は単に読むものでなく、他の／後続の研究者が「使う」ものだということを踏まえた、非常に親切な作りである。著者の要望であったろうが、それに応えた出版社にも敬意を表したい。

最後に著者の今後の研究に向けた注文を一つ記しておく。本書の序章で著者は、この書の課題を「……日本軍政期を通じて彼ら（華僑）に対しどのような施策が展開され、……華僑社会の側はどのようにそれに応じていったのかを、微細に描き出すこと」（p.55）だとする。そして『『微細に』』とここであえて述べたのは、そうすることこそが、いわゆる『大きな物語』に回収されるのを避け、可能な限り同時代人々の経験に接近する方法だと信じるからである」と言う。著者いわく「ここで遠ざけたい『大きな物語』とは、主要にはふたつある。ひとつは、いわゆるナショナリズムの物語であり、もうひとつは、当時の日本軍政のプロパガンダが見せようとした絵に基づく物語である」。¹⁾

ナショナリズムや日本の戦争スローガンに代表されるイデオロギーを基準に人々の言動を安直に価値判断するのでなく、人々や組織がどのような状況で何を言い何をしたのか、その事実自体をコンテクストに即して「微細に」明らかにするという著者の姿勢は本書を通じて徹底しており、それを目指すと言った課題は十二分に達成されている。

だが、本書においては、ナショナリズムや戦争をはじめとする「大きな物語」は著者が追及し描き出す膨大な事実の「前提」ないし「背景」としてのみ扱われている点が、評者にはいささか不満なのである。²⁾ ある時代・地域の社会やそこに生き死にする人々の生活も喜怒哀楽も、それらを翻弄する「大きな物語」の分析抜きには究明し切れないのではないだろうか。グランド・ナラティブを

語らない、というのはここ数十年の学界の流行りでもあり無難な姿勢でもあろう（むろん本書をなすまでの著者の苦心を否定するものではない）が、本作以降の著者にはそこに安住して頂きたくない。³⁾ 人類史の「大きな物語」は21世紀にも終わらないであろうし、歴史叙述は大から小まで自分なりの物語を紡ぐことなしには成立しない。今後はぜひ「大きな物語」自体の生成・普及・影響のありさまを「微細に」分析し描くことにも挑んでほしい、というのが評者の希望である。

（貞好康志・神戸大学大学院国際文化学研究科）

言及・参考文献

- リオタール, ジャン＝フランソワ. 1989. 『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』 小林康夫（訳）. 東京：水声社.（原著 Lyotard, Jean François. 1979. *La condition postmoderne: Rapport sur le savoir*. Paris: Éditions de Minuit.）
- 津田浩司. 2011. 『『華人性』の民族誌——体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから』 京都：世界思想社.
- . 2017. 「『歴史をまっすぐに正す』ことを求めて——国家英雄制度をとおした、ある歴史家の挑戦」『『国家英雄』が映すインドネシア』, 山口裕子；金子正徳；津田浩司（編）, 213–260 ページ所収. 松本：木犀社.
- .（監修・解題）. 2019. 『復刻 共栄報 1942～1945』台北：漢珍數位圖書；東京：ゆまに書房.

	櫻田智恵. 『国王奉迎のタイ現代史——	
	プーミポンの行幸とその映画』 ミネルヴァ書	
	房, 2023, vii+323+20p.	

プーミポン国王の地方行幸が「国王神話」の形成に大きな役割を果たしたことは広く知られている。しかしどの時期にどのような行幸を行ったのかを一次資料にあたって詳細に調べ上げ、その意

- 1) このように、著者がいう「大きな物語」とは、この語の提唱者であるリオタールの元々の用法（科学が自らの正当性を担保するための哲学）とはかなり異なる〔リオタール 1989〕。
- 2) 個人や社会の実態を「大きな物語」に回収せず、「微細に」描くというのは、実はデビュー作〔津田 2011〕以来の著者の基本姿勢であり真骨頂でもある。おそらく本書はその到達点であろう。

- 3) 津田〔2017〕は、インドネシアの「国家英雄」の指定・顕彰制度を題材に、ナショナリズムと歴史叙述をめぐる諸問題に小稿ながら鋭く切り込んでいる。

味をタイ現代史の流れの中に位置づけた研究はこれまでになく、それを成し遂げた本書の学術的意義は非常に大きい。タイ政治に関心を持つ者にとっては必読書の1つになるであろう。本書は以下のような構成になっている。

序章 「プーミポン国王」とは何だったのか

第一部 「国王神話」の黎明

第一章 プーミポン国王が背負った「使命」

第二章 行幸開始前夜

第二部 「国王神話」の揺籃

第三章 プーミポン国王が行く

第四章 膨らむ国王の存在感

第五章 分身化する映画、奉迎の「完成」

第三部 「国王神話」の佳境

第六章 生身の国王が行く

第七章 御簾の奥へ

補論 タイにおける映画の歴史

終章 神話「プーミポン国王」の誕生

結びに

「結びに」に書かれている「本書では、タイ地域研究における根本的疑問とも言えるプーミポン国王がなぜ人々から敬愛されるのかという問いに挑んだ。できる限り一次資料から、地方行幸と『陛下の映画』の開始と展開について詳細に見ていくことで、『プーミポン国王』という神話が形成・流布していく過程の一端を描き出すことができた」(p. 305)という文章は、本書の特徴を的確に表している。

著者が描いたのは大きな現象の「一端」である。十分に明らかにされてこなかった重要な「一端」を詳細に調べ上げた意義は極めて大きい。しかしその「一端」についての描写があまりに濃密であるために他のさまざまな「一端」の存在が読者の視野から抜け落ちてしまう危険性もあるように思われる。本書評では、本書が明らかにした「一端」を相対化する必要性を中心に論じることとする。

著者の「できる限り一次資料」にあたるという姿勢は賞賛に値する。膨大な公文書に目を通すことは忍耐力を要する作業である。しかし公文書は、行幸を企画し、実行した側によって書き残された

ものである。著者は、公文書だけでなく、当事者へのインタビューも行っているが、インタビューした相手は行幸を企画、実施した側の人物であり、一般住民へのインタビューは行っていない。

大きな現象のすべての面を明らかにすることが難しい場合、比較的調べやすい「一端」について集中的に情報を収集し、まずはその「一端」を明らかにすることは決して悪いことではなく、学術的にも正しい判断であろう。しかしそのような場合でも、それ以外の「一端」の存在をある程度は意識することが望ましい。

第一章では、「陛下が訪問された地域では、その後年を追うごとに暮らし向きが良くなっていきます」「陛下が通ったところはどこでも、年を追うごとに素晴らしい改善が見られます。……人々の健康状態はより良くなり、環境は良くなり、経済状況も良くなっています」(p. 57)という文章や発言を引用しているが、それが事実であるかは検証していない。

著者が指摘しているようにプーミポン国王の地方行幸の行き先には大きな偏りがあり、行幸回数は離宮のあるプラチュアアップキーリーカン、チェンマイ、サコンナコン、ナラティワートの4県が突出している (pp. 68-69)。この4県のうち、バンコクから近く、フアヒンというリゾート地のあるプラチュアアップキーリーカン以外の3県の平均家計所得は77あるタイの県の中の下位にランクされる。貧しい地域の状況を改善するために離宮を作り、そこを重点的に訪問したとも解釈できるかもしれないが、国王が盛んに訪問してから50年近く経っても、これらの県の社会経済状況が他県とさしてかわらなかつたり、見劣りしたりするという事実は、行幸の効果に疑念を抱かせる。評者は、1980年代後半にサコンナコン県で農村調査を行ったことがあるが、実際には農民たちの生活向上に役に立っていないのに、行幸や王室プロジェクトの効果が過大に喧伝されていることに対する不満の声も耳にした。

第七章では、1970年代後半に「国王の慈雨プロジェクト」が小学校の教科書に掲載されるようになったことにも言及している (pp. 249-251)。「天才科学者」でもあるとされるプーミポン国王が考

案した方法によって人口雨を降らせ、水不足に苦しむ農民たちを救うというプロジェクトであるが、その評価は都市部と農村部とでは大きく異なる。教科書に書かれていることと実態との乖離を目の当たりにする機会の少ない都市部では「慈雨プロジェクト」は国王の慈愛の深さと知能の高さを示すものだととらえる人が少なくなかったのに対し、毎年のように水不足に苦しむ地域では、「慈雨プロジェクト」が実際にはあまり効果がないことを実感している人が多く、プロジェクトの評判は芳しくない。

チェンマイとサコンナコンは2000年代以降、タクシン派の牙城となってきた。国王や王妃がタクシン元首相を好ましく思っていないことを知っても、これらの県の有権者の多くはタクシン派の政党に投票し続けた。行幸も慈雨プロジェクトも、実態とはかなりかけ離れた宣伝映像や教科書の記述のみを目にする都市部の住民と、実態を目にするものの多い地方の農民たちとでは、国王のイメージ向上効果に違いがあった可能性には本書は言及していない。

「プーミボン国王がなぜ人々から敬愛されるのか」という問いは、確かにタイ地域研究において重要な問いである。著者は序章の冒頭で、2016年にプーミボン国王が崩御した際の様子を描写している。「国王が入院していたシリラート病院の周辺には、国王の写真を持って快復を願いに訪れた人々が多くいた」(p. 1)、「(崩御後は)黒服を着用しない者などには、前国王を侮辱しているとして、リンチなどの制裁が加えられることさえあった」(pp. 1-2)と書いている。どちらも事実である。

しかし2020年に王室改革を要求するデモが起きた時に保守派の論客が述べた「こうしたデモに参加している者の数はタイ国民全体からみればごくわずかの割合でしかない」というロジックを適用すれば、国王が今まさに息を引き取ろうとしている時になっても、圧倒的多数のタイ人はシリラート病院に駆けつけなかったのもまた事実である。

評者は、国王崩御の翌日にバンコクに飛んで、バンコク市内を歩き回ったが、黒服を着ていない人も結構おり、リンチに遭うこともなく平然と街を歩いていた。崩御後の数日はショッピングモー

ルのゲームセンターも営業を続けており、若者たちが笑い声をあげてゲームに興じていた。記帳場が設けられた王宮にも崩御の2日後に行ったが、それほど長い列ができていたわけではなく、あまり長く待つことなく記帳できたし、記帳の列に並んでいる人たちの中には、王宮内の建物を背景にして笑顔でセルフイーを撮る人も少なくなかった。国王への敬愛の度合いには、タイ人の間にもかなりの濃淡の差があったが、そうした濃淡の存在は、公文書を読んだり、役人にインタビューしたりするだけではなかなか見えてこない。

本書には、タイ人が国王に対して抱く感情の多様性にあまり注意を払わなかったと感じられる箇所がいくつかある。例えば、序章では「国王が政治に密接に関わる体制を、民衆はなぜ積極的に支持してきたのだろうか」(p. 26)という問いも立てている。「国王が政治に密接に関わる体制」を「積極的に支持」した人がいたことは間違いない。しかし積極的に支持しなかった人もいた。「民衆はなぜ積極的に支持してきたのだろうか」ではなく、どのような人たちがどのような時に積極的に支持し、どのような人たちがどのような時に積極的に支持しなかったのかという問いをまず立てた方が、より深い考察ができたように思われる。

第七章では、1988年のプレーム首相の退陣について、「国王はプレームにこの上奏文を転送し、プレームは総選挙後の首相続投を辞退した。プレームの退陣劇は、次のことを示している。まず、国民が政権に対する不満を国王に上奏する、つまり政治的な問題を国王が解決するという体制を国民が容認していることである」(p. 258)と書いている。プレーム首相を辞任させるべきだと国王に進言する上奏文に署名したのは99人の知識人たちであった。タイ国民のごく一部でしかない。国王を政治に関与させるべきではないという理由から、この上奏文への署名を断った大学教員も何人かいたし、このような上奏文の提出を批判した著名人も何人かいる。国民という語に何の限定語もつけずに「国民が容認している」と断定してしまうと、国王の政治関与について、タイ人の間にも以前から多様な意見があったことを見えにくくしてしまいかねない。

本書は、1950年代から70年代にかけて行幸や「陛下の映画」によって「国王神話」が着実に構築され、1980年代までにそれは揺るぎないものとなり、国王が「御簾の奥」に引きこもり、行幸を行わなくなっても神話を維持できるほどになったと論じている。「国王神話」が1990年代にピークを迎えたことは他の研究者も指摘しており、「国王神話」構築の試みを一種の成功物語として描くことは誤りではないであろう。ただし、その「成功」は完璧なものではなかった。しかし本書は、第七章の最後の節の直前まではほぼ完璧な成功物語として描き続ける。

「国王神話の薄暮」と題された第七章の最後の節はわずか7ページ弱しかないが、この節では、不敬罪の廃止や国王が政治に関与しないことを求める王政改革要求運動が2020年に大きな盛り上がりを見せたことにも言及している。著者はこの節を「今、タイの人々は長い間魅せられてきた『国王神話』の幻影から目覚めつつある。……『プーミボン国王』を思い浮かべる時、人々は『古き良き』時代の象徴として彼を思うのか、それとも現在起こっている政治的問題の『根源』として思うのか、……タイは今、まさに大きな転換期に立っている」(p. 302)という文章で締めくくっている。

すべてのタイ人が長い間「国王神話」に同じ程度に魅せられてきたわけではない。1970年代に学生運動に参加していた評者の知人の一人は、国王の肖像を掲げていれば治安部隊も発砲を躊躇するだろうと思って防弾チョッキ代わりに国王の肖像画を頭上に掲げてデモ行進をしたが、治安部隊が国王の肖像画など気にせず発砲してきたので、銃弾で穴だらけになった国王の肖像画をこの役立たずと罵って思いきり踏んづけて逃げたと1980年代前半に語っていた。

著者は、「目覚めた人々」という言葉は、2020年の王政改革要求デモでアーンノンが初めて使ったように書いているが(p. 301)、この言葉が王室に批判的な人たちの間で広く使われるようになったのは、2008年10月にシリキット王妃がタクシン派の政権を選挙以外の方法で倒そうとする黄シャツの運動を支持する姿勢を明確に示し、それをプーミボン国王が黙認した時からである。王族の政治関

与に対するタイ人の間の意見の相違は、ワチラロンコーン国王の治世になって初めて生じたものではなく、プーミボン国王の治世から生じていた。

本書が丹念に描いた「国王神話」に魅せられたタイ人が大勢いたことは間違いない。多くのタイ人が「国王神話」に魅せられた過程の「一端」を丹念に描いた本書の意義は非常に大きい。ただし、本書は、「国王神話」に魅せられた度合いは人によってかなりの違いがあり、国王の政治関与についてはこれまでも、そしてこれからも、タイの人たちの間に多様な意見が併存し続けることを常に忘れずに読む必要がある。

(浅見靖仁・法政大学法学部)

福岡まどか(編著).『現代東南アジアにおけるラーマーヤナ演劇』めこん, 2022, 253p.

インドの二大叙事詩の一つラーマーヤナは、9世紀頃から東南アジアに広く伝わり、各地の宗教や哲学、芸能などと結びつきながら、それぞれ独自の発展を遂げてきた。興味深いことに、この古代インドから伝わる大叙事詩は、現代社会において伝統文化として過去に閉じ込められているのではなく、今なお多くの人に日常生活のなかで親しまれ、参照され、更新され続けている。

本書は、今なお変化を続けるこのラーマーヤナを主題として取り上げ、その東南アジアにおける多元的な意味と表象を考察しようとするものである。以下では、まず本書の内容について概観し、その意義と課題について論じたい。

第1章で示される本書の構成に従えば、読者は最初に3つの映像作品を見ることになる。作品は、本書の作品紹介ページにあるQRコードを読み取ることで鑑賞することができる。最初の作品、インドネシアの女形舞踊家のディディ・ニニ・トウォによる舞踊劇《人魚ウラン・ラウンとアノマン対レカタ・ルンブン》は、ディディがカンボジアの伝統舞踊に見られる人魚とアノマン(ハヌマーン)のエピソードに着想を得て制作されたものだ。

続くアニメーション作品は、インドネシアのジョグジャカルタ出身のダラン(インドネシアの